

小児腎炎の病態病理に関する研究 —まとめ—

重松 秀一

信州大学医学部病理学教室

この研究班では各種小児腎炎の病態の把握をすすめることをはじめとしてヒトの腎炎に対応できる腎炎モデルの作製、さらに実験腎炎を用いての薬剤その他の腎炎に対する影響効果についての研究を行っている。

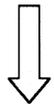
小児腎炎の病態把握の研究として木原班員は同胞内発症をした IgA 腎炎の病理組織学的検討を行い、その組織像からは単発例の IgA 腎炎と異なる所見は見出し得ないが、糸球壁にみられる種々の病変の重要性を強調した。土田班員は千葉地区における長年にわたる学校集団検尿の充実ともないその大きな成果として IgA 腎炎が年10万人に100人の割合で発見され、IgA 腎症の成人期へのキャリアオーバーの実態がつかめつつあることを報告した。しかし集団検尿は学童期のみでは不十分であり、特に思春期での実態把握が IgA 腎炎の自然歴を解明する上で重要であることを強調した。坂口班員は膜性増殖性糸球体腎炎のうち特に type 3 について小児、成人例を検討し、小児においては type 1 から 3 への移行のあることを見出し、成人に比較的多い type 3 も移行の可能性もあり type 1 との比較検討の必要性を強調した。藤沢班員は溶連菌細胞膜の解析から細胞膜抗原に対する 9 種のモノクロナル抗体の作製を行い、その抗血清を用い、ELISA 法により腎炎患児の抗体価の測定を行った。今回の細胞膜抗原は急性腎炎の発症には直接関与していないとの結論が得られたが、IgA 腎炎を含む多くの抗原不明の腎炎について膜抗原の関与の有無のチェックが必要と考えられる。山口班員は大腸菌による腎盂腎炎罹患妊婦からの胎児、新生児への感染伝播の存在を認識するべく、大

腸菌 P 線毛に対する血中抗体の測定の有用性を強調した。

腎炎モデルの開発に関する研究では馬杉班員は ddy 系マウスに羊抗 IV 型コラーゲン血清を投与すると他の系にくらべて有意にメサンギウムに IgA 沈着型腎炎の発現をみた。しかしその沈着は非免疫的におこっているとの結論に達し、IgA 腎炎の成り立ちの理解に一つの示唆を与えた。鈴木班員はコクサッキー B 4 ウイルスを用いて IgA 沈着性の糸球体病変の作製に成功しているが、そのウイルスの持続感染状態が IgA の糸球体沈着及び糸球体病変の進展に重要な因子との予想の下に今後さらに細かい実験計画をたて研究をすすめる。

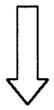
柴田班員は膜性腎炎のモデルとして知られているヘイマン腎炎を利用して病変惹起抗原の同定をラット及びヒトで行った。その結果糖蛋白 gp 330 と免疫学的、生化学的に類似した抗原がヒト尿細管にも存在することが証明されヒト膜性腎炎の抗原の一つが明らかとなった。

腎炎の治療に関する研究では河西班員は紫斑病性腎炎の重症例について従来すすめてきた免疫複合体との関連に注意をはらい、血漿交換療法を試みその有効性と問題点を指適した。山口班員は腎炎ラットへの運動負荷の影響を検討した。今回の実験では運動が蛋白排泄量の増悪因子となるとはいえないとの結論をえた。重松班員はサイクロスポリン A の液性抗体産生抑制効果に注目しラット血清病腎炎でその効果を検討した。予備免疫の段階で投与されると完全な腎炎発症抑制がおこることがわかり、本剤が T_H 細胞を抑制することが示唆された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児腎炎の病態病理に関する研究 - まとめ -

重松秀一 信州大学医学部病理学教室

この研究班では各種小児腎炎の病態の把握をすすめることをはじめとしてヒトの腎炎に対応できる腎炎モデルの作製さらに実験腎炎を用いての薬剤その他の腎炎に対する影響効果についての研究を行っている。

小児腎炎の病態把握の研究として木原班員は同胞内発症をした IgA 腎炎の病理組織学的検討を行い、その組織像からは単発例の IgA 腎炎と異なる所見は見出し得ないが、糸球壁にみられる種々の病変の重要性を強調した。土田班員は千葉地区における長年にわたる学校集団検尿の充実にとともにその大きな成果として IgA 腎炎が年 10 万人に 100 人の割で発見され、IgA 腎症の成人期へのキャリアオーバーの実態がつかめつつあることを報告した。しかし集団検尿は学童期のみでは不十分であり、特に思春期での実態把握が IgA 腎炎の自然歴を解明する上で重要であることを強調した。坂口班員は膜性増殖性糸球体腎炎のうち特に type3 について小児成人例を検討し、小児においては type1 から 3 への移行のあることを見出し、成人に比較的多い type3 も移行の可能性もあり type1 との比較検討の必要性を強調した。藤沢班員は溶連菌細胞膜の解析から細胞膜抗原に対する 9 種モノクロナル抗体の作製を行い、その抗血清を用い、ELISA 法により腎炎患児の抗体価の測定を行った。今回の細胞膜抗原は急性腎炎の発症には直接関与していないとの結論が得られたが、IgA 腎炎を含む多くの抗原不明の腎炎について膜抗原の関与の有無のチェックが必要と考えられる。山口班員は大腸菌による腎盂腎炎罹患妊婦からの胎児、新生児への感染伝播の存在を認識するべく、大腸菌 P 線毛に対する血中抗体の測定の有用性を強調した。

腎炎モデルの開発に関する研究では馬杉班員は ddy 系マウスに羊抗 型コラゲン血清を投与すると他の系にくらべて有意にメサングウムに IgA 沈着型腎炎の発現をみた。しかしその沈着は非免疫的におこっているとの結論に達し、IgA 腎炎の成り立ちの理解に一つの示唆を与えた。鈴木班員はコクサッキー B4 ウイルスを用いて IgA 沈着性の糸球体病変の作製に成功しているが、そのウイルスの持続感染状態が IgA の糸球体沈着及び糸球体病変の

進展に重要な因子との予想の下に今後さらに細かい実験計画をたて研究をすすめる。

柴田班員は膜性腎炎のモデルとして知られているヘイマン腎炎を利用して病変惹起抗原の同定をラット及びヒトで行った。その結果糖蛋白 gp330 と免疫学的, 生化学的に類似した抗原がヒト尿細管にも存在することが証明されヒト膜性腎炎の抗原の一つが明らかとなった。

腎炎の治療に関する研究では河西班員は紫斑病性腎炎の重症例について従来すすめてきた免疫複合体との関連に注意をはらいつゝ, 血漿交換療法を試みその有効性と問題点を指適した。山口班員は腎炎ラットへの運動負荷の影響を検討した。今回の実験では運動が蛋白排泄量の増悪因子となるとはいえないとの結論をえた。重松班員はサイクロスポリン A の液性抗体産生抑制効果に注目しラット血清病腎炎でその効果を検討した。予備免疫の段階で投与されると完全な腎炎発症抑制がおこることがわかり, 本剤が TH 細胞を抑制することが示唆された。